

陶器南遺跡発掘調査概要・IV

—府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査—

1998.3

大阪府教育委員会

はしがき

堺市の東南部に広がる泉北丘陵には、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の生産地であった陶邑窯跡群が広がっています。この泉北丘陵では、1960年代半ばから泉北ニュータウン建設のため大規模な開発が行なわれました。このため、多くの窯跡等の遺跡が調査されるとともに、景観も一変しました。一方、泉北ニュータウンのすぐ北東に位置する陶器北地区を中心とする一帯は、田園風景が良好に残っており、その景観の落差の大きさに驚かされます。

陶器北地区も、「陶器」という地名に示されているとおり、陶邑窯跡群と密接な関係をもった地域と考えられます。周辺には須恵器窯跡や、陶器千塚古墳群、延喜式内社「陶荒田神社」などの須恵器生産に関連すると思われる遺跡や神社があります。

この地区において、大阪府農林水産部により府営は場整備事業「陶器北地区」が実施されることになり、大阪府教育委員会では、平成3年から発掘調査を継続的に実施しております。平成3年から5年かけては、陶器千塚古墳群の調査を実施しました。この古墳群は、現在ではわずか数基が現存しているのみです。しかしながら、調査の結果、削平された多くの古墳の周濠を発見し、この地域が「千塚」と呼ばれるほど多数の古墳が存在していたことを確認することができました。

平成5年には、試掘調査の結果により、陶器南遺跡が圃場整備地区のほぼ全域に広がることが明らかとなりました。このため、平成6年から陶器南遺跡の発掘調査を実施することとなり、平成9年度で4年目をむかえることになりました。

既往の調査では、古墳時代、奈良時代の須恵器生産に関連したと思われる人々の集落跡、中世の居館跡や土地の開発状況を確認することができました。今年度の調査においても、古墳時代、奈良時代の集落跡を確認することができ、現在では水田の下に封印された、この地域の歴史の一端を明らかにすことができました。来年度以降も、陶器南遺跡の発掘調査は継続しますので、今後の発掘調査により、より一層の成果が得られることが期待されます。

最後に、今回の調査に際してご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係各位、諸機関に厚く感謝いたしますとともに、今後とも大阪府における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成10年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

例　　言

1. 本書は、府営ほ場整備事業「陶器北地区」予定地内、堺市陶器北に所在する陶器南遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府農林水産部より依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第1係技師 竹原 伸次、同 山田 隆一を担当者として、平成9年9月16日に着手し、平成10年3月31日に終了した。
4. 現地調査にあたっては、大阪府泉州農と緑の総合事務所、堺市教育委員会及び地元関係各位の御協力を得た。記して感謝の意を表します。
5. 本文、挿図に記載した地区割りについては、国土座標第VI系に基づいて、大阪府教育委員会独自に作成したものである。また、標高値は東京湾標準潮位値（T. P. 値）である。
6. 本書に用いた土色は、「新版 標準土色帖 12版」（小山正忠・竹原秀雄編・著）に基づく。
7. 本書の執筆、編集は竹原が行なった。

本文目次

はしがき

例　言

第1章　調査に至る経過

第1節　周辺の環境と既往の調査	1
第2節　今年度の調査	1
第2章　調査の方法	4
第3章　調査の結果	
第1節　第6区	6
第2節　第7区	15
第3節　第8区	19
第4節　第9区	20
第3章　まとめ	28
報告書抄録	32

挿図目次

第1図　調査地周辺の遺跡分布図	2
第2図　陶器窯遺跡調査区位置図	3
第3図　地区割図	5
第4図　6区遺構平面図	7・8
第5図　6区土層断面図	9・10
第6図　6区掘立柱建物跡	11
第7図　6区土坑210・211、溝212遺物出土状況図	12
第8図　6区土坑211出土遺物実測図	13
第9図　6区土坑210、溝212出土遺物実測図	14
第10図　7区掘立柱建物跡	16
第11図　7区遺構平面図、土層断面図	17・18
第12図　8区遺構平面図	19
第13図　8区土層断面図	20・21
第14図　9区遺構平面図	23・24
第15図　9区土層断面図	25・26
第16図　9区掘立柱建物跡	27

第1章 調査に至る経過

第1節 周辺の環境と既往の調査

堺市陶器北、上之に所在する陶器南遺跡は、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の生産地であった陶邑窯跡群のすぐ北に隣接し、南東から北西に舌状に伸びる丘陵の先端部に位置する。現状は、ミニ開発による住宅地が散在しているが、丘陵上から谷へ向かう傾斜地に水田がひろがっており、古くからの景観をよく止めている。

本遺跡の周辺には、前述した陶邑窯跡群を初めとして、陶邑での須恵器生産に係わった人々と密接に関連すると思われる陶器遺跡、田園遺跡、辻之遺跡、小角田遺跡、陶器千塚古墳群などの遺跡が集中している。また、本遺跡の南側には、延喜式内社「陶荒田神社」があり、境内から平安時代の瓦が出土している（第1図）。

大阪府農林水産部は、この地域において緑住区開発関連土地基盤整備事業「陶器北地区」を計画した。これに伴い大阪府教育委員会では、平成3年からこの地域の発掘調査を継続的に実施している。

平成3年から5年にかけては、計画地域の北側にある陶器千塚古墳群の調査を実施した。この古墳群は、現在、わずか数基が現存しているのみであったが、調査の結果、削平された多くの古墳の周濠を発見し、この地域に「千塚」と呼ばれるほど多数の古墳が存在していたことを確認することができた。

平成5年には、試掘調査の結果により、陶器南遺跡が圃場整備地区のほぼ全域に広がることが明らかとなり、平成6年から平成9年度まで陶器南遺跡の発掘調査を実施している。

既往の調査では、古墳時代、奈良時代の須恵器生産に関連したと思われる人々の集落跡、中世の居館跡や土地の開発状況を確認している。

第2節 今年度の調査

陶器南遺跡のみならず、圃場整備など農林関係の発掘調査は、大阪府農林水産部との協議により、耕地整備や新設の水路、道路などで遺構面が削平される区域のみ実施し、盛土される部分については、遺構面が保存されるので調査は実施しない方針となっている。

本年度調査区の東半部についても、平成5年度の試掘調査をふまえた基本設計により、一部が削平されることになったため、当該部分約750m²のみを平成7年度に発掘調査を実施した。

ところが、平成8年度に至り、耕地事務所と地元地権者等との調整により、更に地面を下げた設計に変更されたが、この間の教育委員会との連絡協議が充分ではなく、一部の地区について工事着手される事態となった。

このため、工事着手部分について緊急的に排水路部分を追加1区、2区、及び耕作地となる区



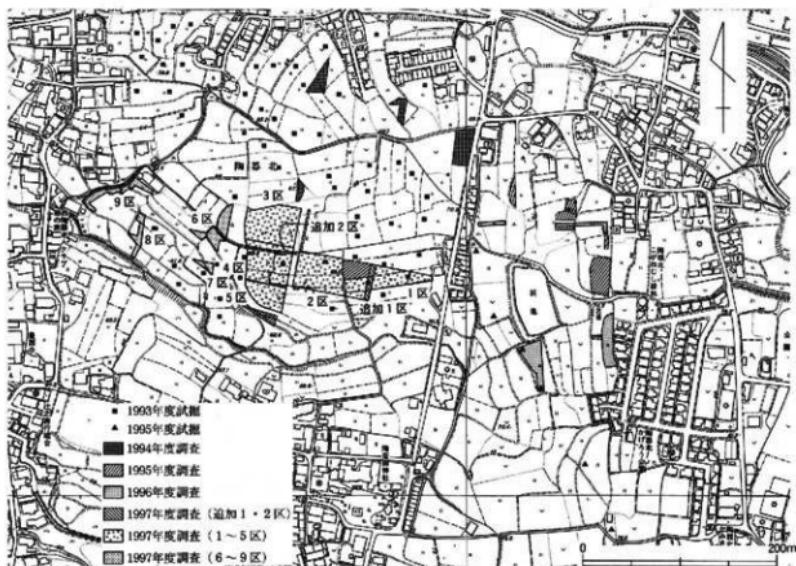
第1図 調査地周辺の遺跡分布図

域について1区から5区の名称を付して約7,850m²を調査し、当初より平成9年度事業として予定していた6区から9区約1,300m²と併せて発掘調査を実施した（第2図）。

1区から5区では、既に遺構面が削平を被った範囲も広く、3区から5区については遺構の残存状況は良くなかったが、1区、2区については削平が浅く、20数棟に及ぶ古墳時代後期、奈良時代の掘立柱建物跡、溝、古墳時代後期の土坑などを検出することができた。

これまでの陶器南遺跡の調査は、削平される部分のみの小面積で飛び飛びであったものが、今回、まとまった大面積の調査を実施したことにより、今まで全容を明らかにできなかつた陶器南遺跡の実態を知る一助となつたことは明らかであるが、当該地区の調査の経緯を考えると文化財の保護上決して望ましいことではない。

なお、本書は、当初より平成9年度に調査を実施する予定であった、6区から9区のみについてその調査成果を報告し、追加1区、2区及び、1区から5区の成果については、平成10年度に遺物整理を実施したうえ、報告する予定である。



第2図 陶器南遺跡調査区位置図

第2章 調査の方法

1. 地区割

大阪府教育委員会では、発掘調査を実施する際、府域全体を統一した物差しで測れるように独自の共通した地区割を設定している（第3図）。

地区割の基準線は国土座標軸（第VI座標系）を使用し、大から小へ計6段階にわたる区画である。

第I区画

大阪府が独自に設定している、1万分の1地形図の地区割図をそのまま使用している。1区画が1万分の1の地形図1枚の範囲となる。区画の最南端を基点とし、縦軸AからO、横軸0から8で表示する。縦6km、横8kmになる。

第II区画

2500分の1地形図の地区割図をそのまま使用している。第I区画を縦、横各4分割し、計16の区画となる。1区画は、2500分の1地形図1枚の範囲であり、表示方法は、南西端を1とし東へ進み、北東端を16とする平行式の区画である。縦1.5km、横2.0kmの範囲になる。

第III区画

第II区画内を100m単位で区画する。縦15、横20の区画になる。表示方法は、北東端を基準に縦をAからOに、横を1から20と表示する。

第IV区画

第III区画内を10m単位で区画する。縦、横各10区画になる。表示方法は、北東端を基点とし、縦をaからj、横を1から10で表示する。

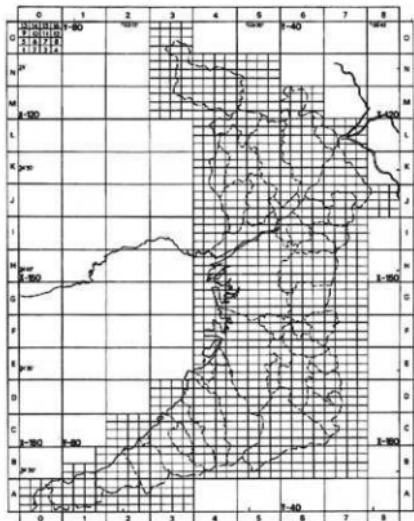
この他、第IV区画を5m単位に区画する第V区画、第IV区画を北東端を基点としてmm単位まで細分できる第VI区画があるが、今回の調査では第V、VI区画は使用していない。

この区画の表示方法は、第I区画から順に記載していくが、今回の陶器南遺跡の調査では、第I区画がE5、第II区画が7になる。第III区画はB19、C16、C17、C18、C19、D17、D18となる。

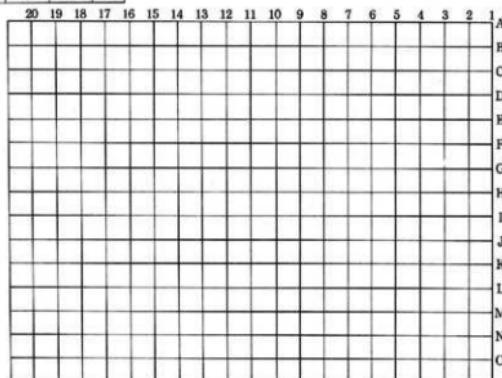
IV区画については、第III区画と共に本文及び図中に示すとおりである。

2. 遺構番号

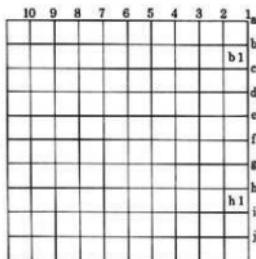
今回の調査では、各調査区において多くの遺構を検出したため、遺構の種類ごとに番号をふることはせず、検出した遺構に順番に番号を付けている。その後の整理の段階で、溝等の遺構の種類をそのまま遺構番号の上に付けた。



第Ⅰ区画



第Ⅱ区画



第Ⅲ区画
第 3 図 地区割図

第3章 調査の結果

今回報告する6区から9区は、陶器窯遺跡が立地する丘陵のほぼ先端部の丘陵頂から南斜面及び谷の最下部に位置している。現状の標高は6区の約67mから、8区の約58mと比高差約9mを測る。調査前は全て水田あるいは畑地として利用されており、北から南にかけて等高線ラインに沿って細かく細分された段々畑となっている（第2図）。以下、各区毎に調査結果を述べていきたい。

第1節 6区

1. 調査の概要

6区は、地形的に北東から南西に向かって傾斜していく3枚の水田で構成されている。切り土の部分にあたる。遺構の検出面から考えると、北に位置する水田の南部が一番高くなっているので、この部分が丘陵の頂部と思われる。調査の結果、多くの柱穴、掘立柱建物跡、土坑、溝を検出した（第4図）。

2. 層序

6区の層序は前述したように、一番北に位置する水田は丘陵の頂上部に位置しているので、耕作土以下、遺構面までは非常に堆積が薄い。また、溝が北に行くにしたがって消滅することから、ある程度削平を受けているものと思われる。調査区中央部から北に緩やかに傾斜している。また、南西にむかっては地形は急激に傾斜し、堆積土の厚みは増していく（第5図）。

層序は、ほぼ水平な堆積状況を示しり、斜面地を開発していくために盛土されたものと思われる。これらの層中からは、多量の古墳時代の遺物が出土したが、明確な包含層と思われるものはない。

3. 遺構

掘立柱建物跡

6区からは多くの柱穴を検出したが、現在掘立柱建物跡を復元できるのは1棟のみである。この掘立柱建物跡は、C18-b, c6から検出した。2間×2間の総柱の建物である。

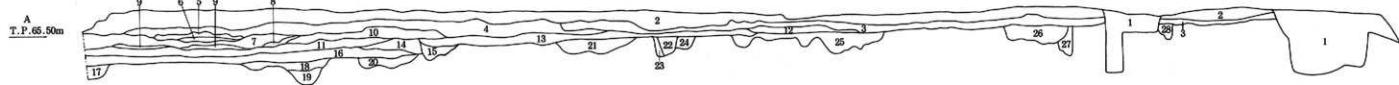
柱間は約2mを測る。方位はN-60°-Eに振っている。柱穴は直径約70から80cm、深さは40から80cmを測り、深さは一定していない。6区から検出した他の柱穴と比べて約2倍の大きさを持つ。全ての柱から柱あたりを検出した。埋土は、にぶい黄褐色シルト、柱あたりは灰黄褐色シルトなどである（第6図）。

土坑210・211、溝212

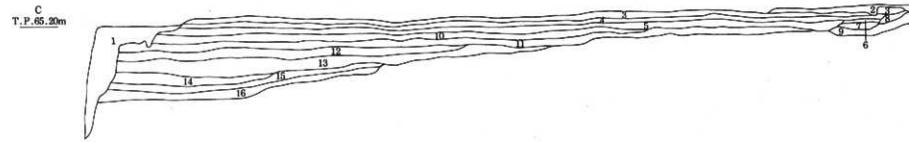
C18-a, b5, 6から検出した。相互に切合い関係を持っている。溝212が一番古く、以下、土坑210、土坑212と新しくなるが、出土遺物からみて時間的関係は近接していると思われる。こ



第4図 6区遺構平面図 (1/200)



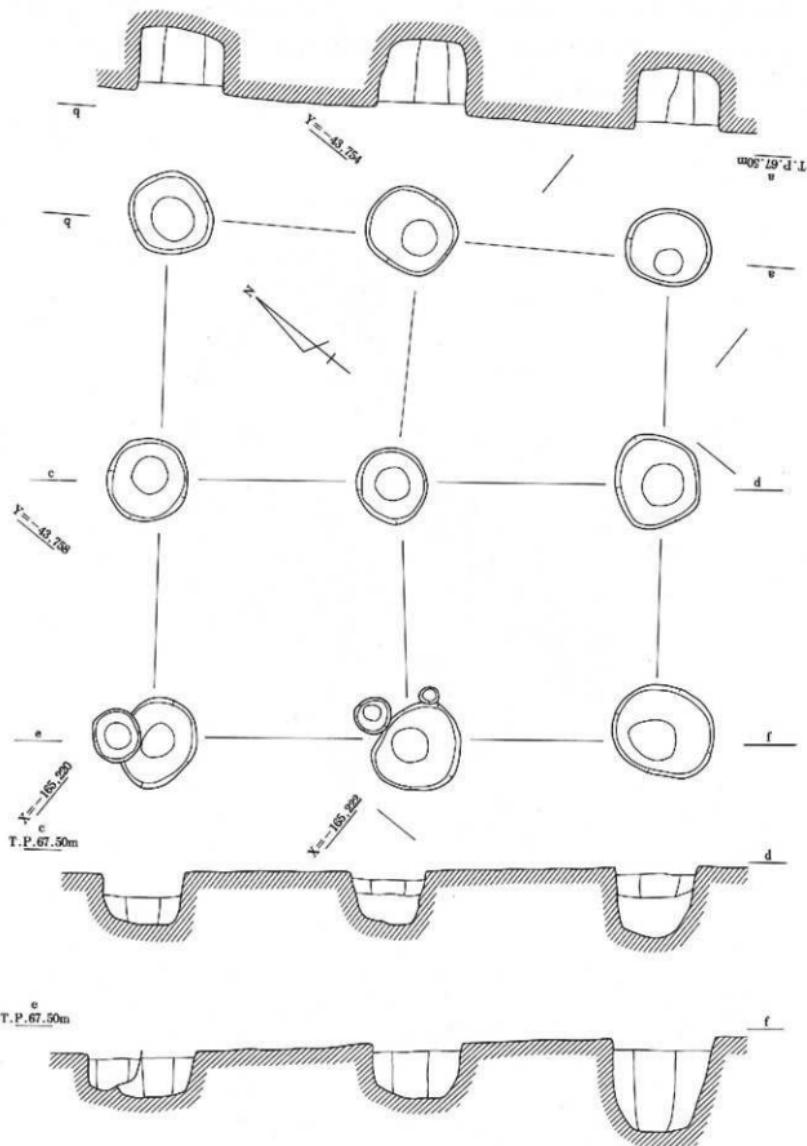
- 1 カクラン、盛土
- 2 黄褐色粘土にやや暗めの黄褐色粘土層じる
- 3 にぶい黄色粘土土にやや明褐色土色じる
- 4 黄褐色粘土土にややからくらじる
- 5 にぶい黄色粘土土にやや褐色土色じる
- 6 にぶい黄色粘土土にやや褐色土色じる
- 7 にぶい黄色粘土土はほりじ
- 8 褐色土上にぶい褐色の混合土、褐質
- 9 褐色土上にぶい褐色の混合土、褐質
- 10 にぶい褐色粘土土にやや褐色土色じる
- 11 にぶい褐色粘土土
- 12 にぶい褐色土上に褐色土色じる
- 13 明褐色粘土土
- 14 にぶい褐色粘土土にやや褐色土色じる
- 15 混合粘土土
- 16 硅酸塩粘土
- 17 にぶい黄色土と褐色土の混合粘土質 (土質の堆土)
- 18 褐褐色土上にやや褐色土色土層に褐色質
- 19 褐褐色土上に褐色土色土層
- 20 にぶい褐色粘土土 (透水の堆土) マンガン多く含む
- 21 混合粘土土に褐色土色土層じる。マンガンやや含む
- 22 褐褐色土上に褐色土色土層じる
- 23 混合粘土土に褐色土色土層じる
- 24 混合粘土土に褐色土色土層じる
- 25 混合粘土土に褐色土色土層じる
- 26 混合粘土土に褐色土色土層じる
- 27 混合粘土土に褐色土色土層じる
- 28 にぶい褐色粘土土



- 1 盛土
- 2 暗褐色粘土土
- 3 黄褐色粘土土
- 4 黄褐色粘土土と褐色粘土土混合土粘質
- 5 黄褐色粘土土
- 6 にぶい褐色土上にやや褐色土色土層じる
- 7 黄褐色粘土土
- 8 黄褐色粘土土にやや褐色土色土層じる
- 9 にぶい褐色粘土土
- 10 暗褐色粘土土
- 11 にぶい褐色土上褐色の混合粘土土
- 12 にぶい褐色土上に褐色土色土層じる
- 13 にぶい褐色土上に褐色土色土層じる
- 14 にぶい褐色土上に褐色土色土層じる
- 15 にぶい褐色土上に褐色土色土層じる
- 16 にぶい褐色土上に褐色土色土層じる

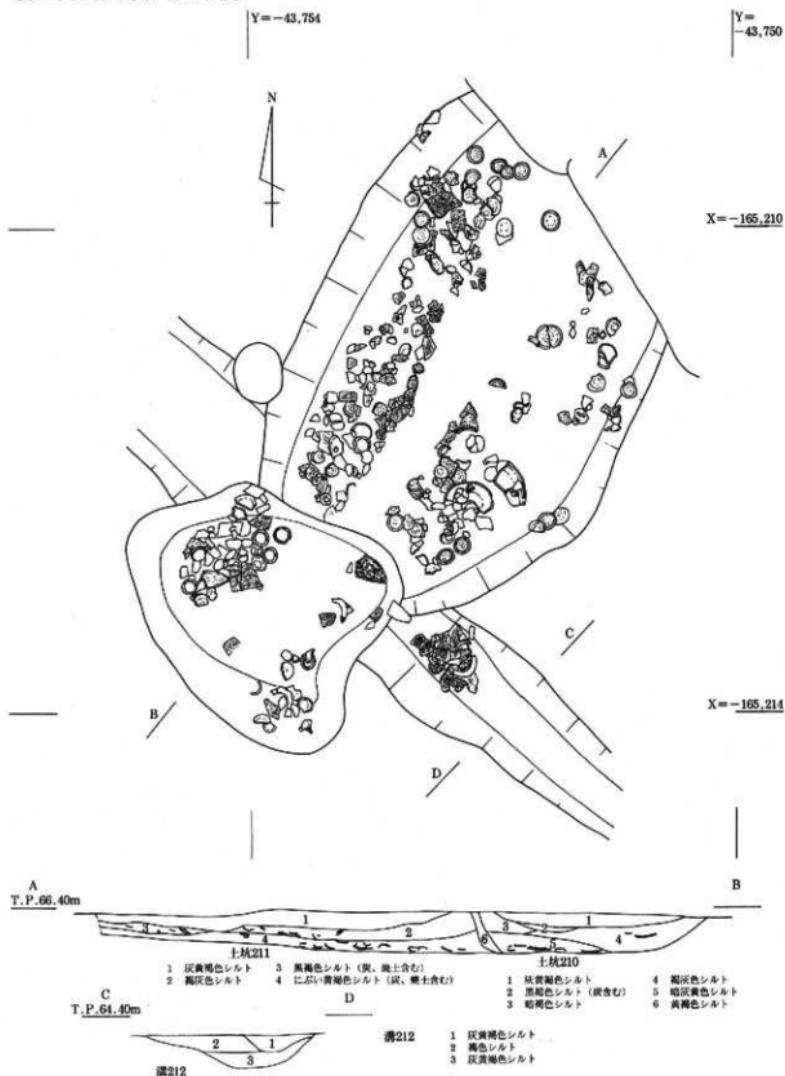


第5図 6区土層断面図

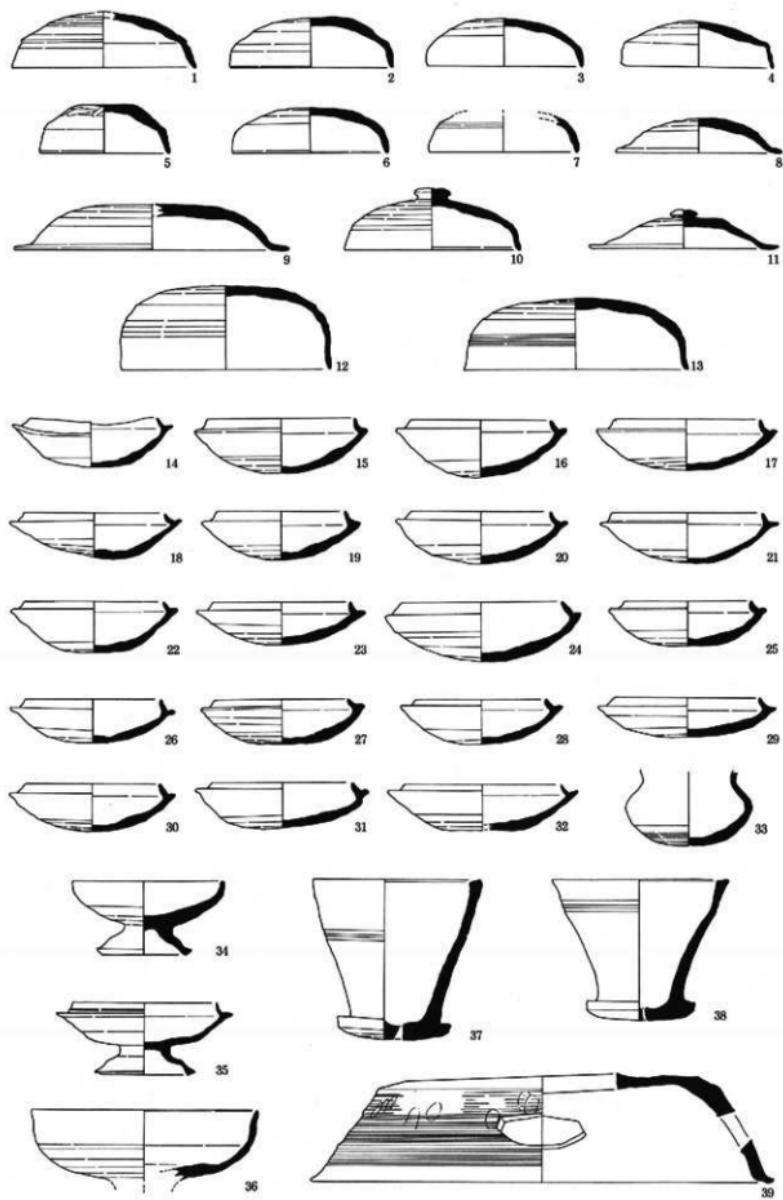


第6図 6区掘立柱建物跡 (1/40)

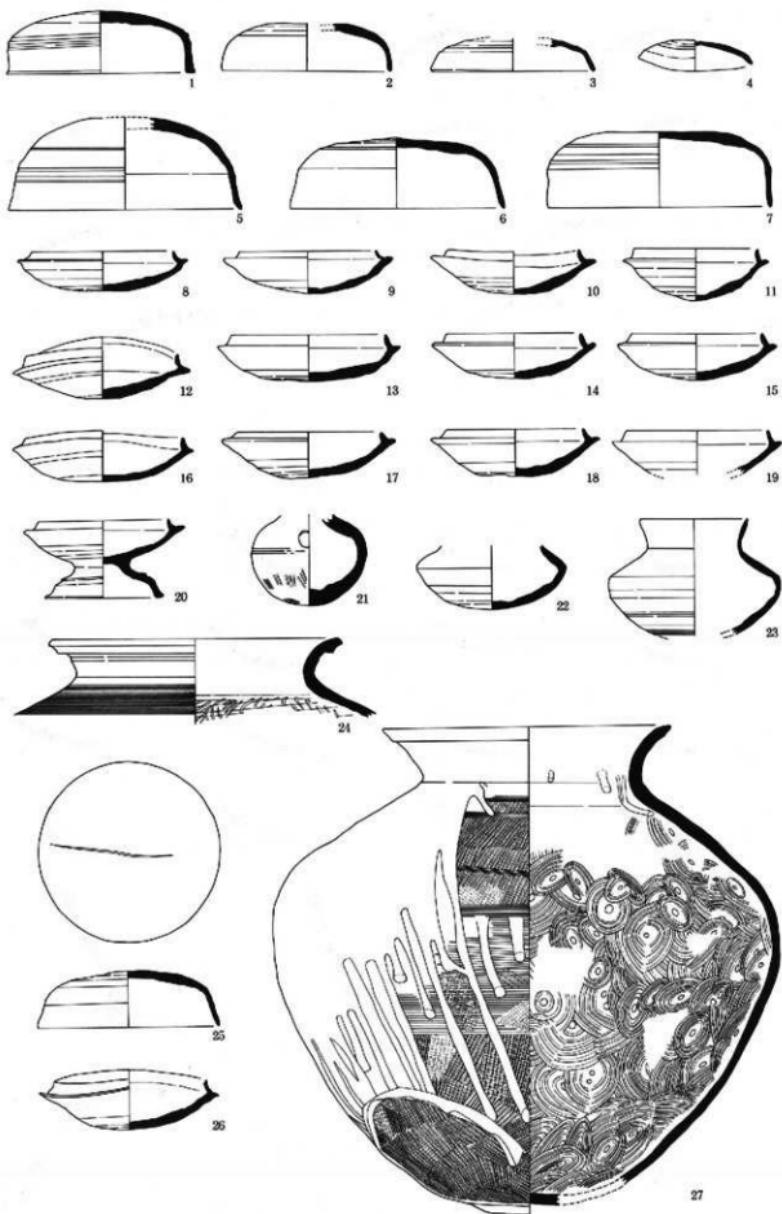
の土坑210、211からは、多量の須恵器が出土した。土師器の出土はほとんど無い。須恵器は焼け歪みや生焼けも少ないが、出土状況は、雑然としており、何らかの意図の元に投棄されたのではなく、廃棄されたものと思われる。溝212からは須恵器の壺が一個体潰れた形で出土している（第7図、第8図、第9図）。



第7図 6区土坑210・211、溝212遺物出土状況図



第8図 6区土坑211出土遺物実測図



第9図 6区土坑210 (1~24)、溝212 (25~27) 出土遺物実測図

第2節 7区

1. 調査の概要

7区は6区と同じように、地形的に北東から南西に向かって傾斜していく、斜面を切り盛りして築造された2枚の水田で構成されている。調査区は3角形を呈し、切り土の部分にあたる。丘陵の頂上部から谷の底へのほぼ中間に位置している。

7区は調査に入る前は、谷への傾斜角度から考えて、水田築造のための盛土が厚く堆積しているだけで、遺構は存在しないものと考えていた。しかしながら、7区においても柱穴、掘立柱建物跡、土坑、溝を検出することができた。(第11図)。

2. 層序

7区の層序は、斜面を切り盛りして水田を築造しているため、南西に行く従い、土層の厚さは1mを越える。また、何回にもわたって水田を嵩上げしていることが確認できた。

層序は、6区と同じくほぼ水平な堆積状況を示している。これらの層中からも、多量の古墳時代の遺物が出土したが、明確な包含層と思われるものはない(第11図)。

3. 遺構

掘立柱建物跡

7区からは、面積狭いものの柱穴、溝、土坑を検出した。また、このような斜面地からは想像もできなかった掘立柱建物跡を1棟検出した。

掘立柱建物跡は、C18-g7、8から検出した。2間×2間の総柱の建物であるが南側の一本のみは、後世の水田築造の際に削平され検出できなかった。

柱間は約1.5mから1.7mを測る。方位は6区から検出した掘立柱建物跡と同じくN-60°-Eに振っている。柱穴は直径約40cm、深さは50から20cmを測るが、この理由は斜面によるものであり、柱穴の深さは一定している。全ての柱から柱あたりを検出した。埋土は、にぶい黄褐色シルト、柱あたりは褐色シルトなどである(第10図)。

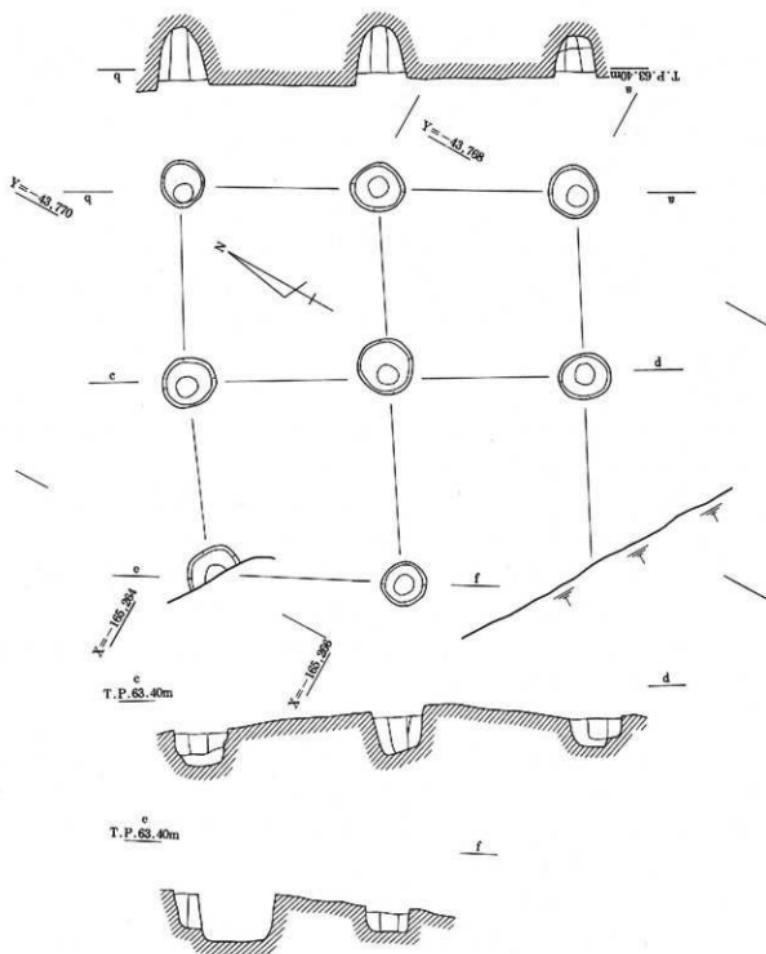
溝21、32

C18-f、g8から、幅約2mの間隔を持って平行して検出した。両溝とも北西から南東に向かう溝である。この方向は、この調査区の等高線のラインとほぼ平行している。

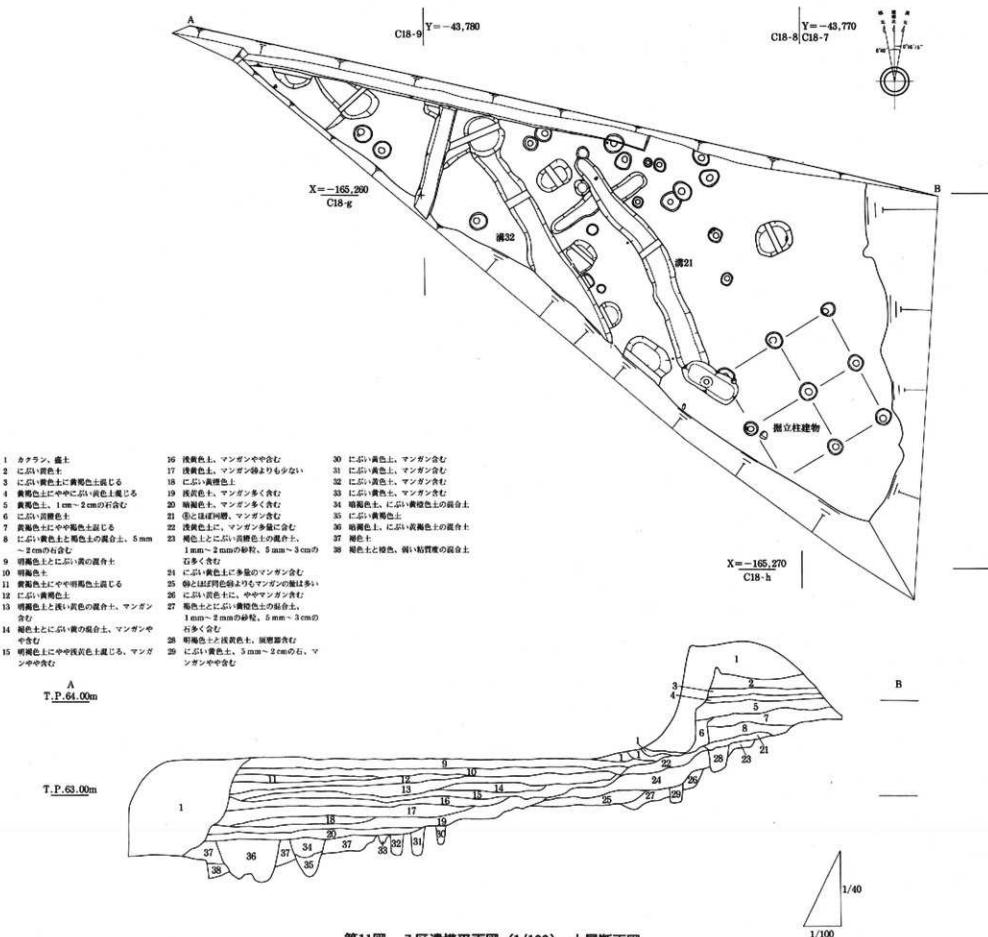
溝21は、幅約70cm、深さ約20cm、検出長約6mを測る。埋土は上下2層に別れ、上層はにぶい黄褐色シルト、下層は灰黄褐色シルトである。

溝32も、溝21と同じく幅約70cm、深さ約20cm、検出長約6mを測るが斜面を下るにしたがって幅は広がり約1mとなる。埋土は上下2層に別れ、上層はにぶい黄褐色シルト、下層は褐色シルトである。

両溝からは多くの須恵器が出土したが、土師器については、6区土坑210・211、溝212同様ほとんど出土しない。



第10図 7区掘立柱建物跡 (1/40)



第11図 7区遺構平面図 (1/100)、土層断面図

第3節 8区

1. 調査の概要

北東から南西に向かって傾斜していく、斜面を切り盛りして築造された3枚の水田で構成されている。最下段は谷の底にあたる。水路部分と若干の切土部分にあたる。

2. 層序

8区の層序は、最上段は斜面を切り盛りして水田を築造しているため、南に行く従い、土層の厚さは1mを越える。また、7区と同じように何回にもわたって水田を嵩上げしていることが確認できた。また、中段の北側は水田築造のために大幅な削平を受けており、耕作土の下すぐには地山となる。反対に南側は厚く2m以上も盛土されている。最下段の谷は現状から2m掘削した所で地山を確認することができた。

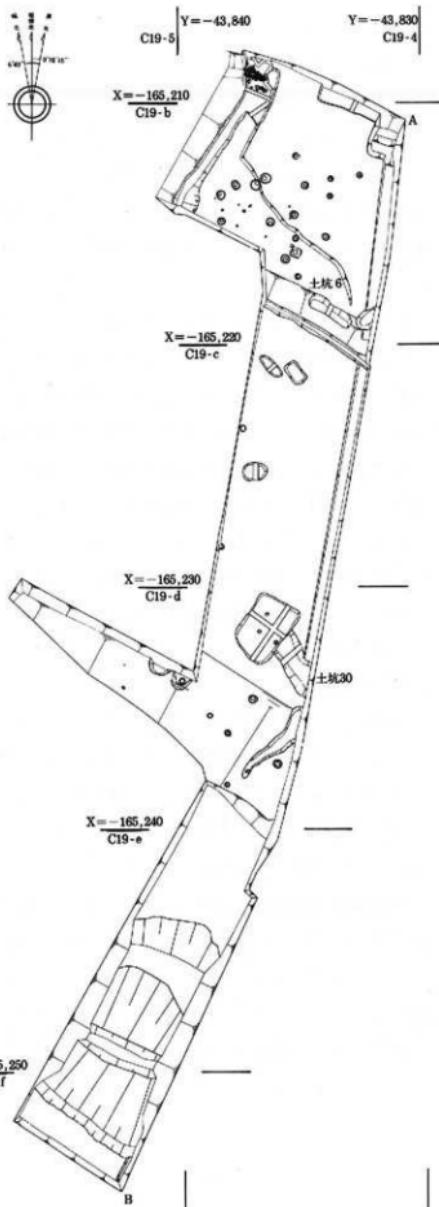
断面を良く確認すると谷が埋まる段階で3回ほど谷を最掘削して水路等に利用していたことがわかる。

遺物は、須恵器等が出土しているが、最上層から瓦器が出土しているため、少なくとも中世にはこの谷は埋没したものと思われる(第13図)。

3. 遺構

柱穴、土坑、溝を検出したが、建物復元はできない。また、土坑6からは、中世の遺物が出土した。今回の調査で唯一の中世の遺構である。

また、土坑30から須恵器大甕の口縁部が出土した(第12図)。



第12図 8区遺構平面図 (1/200)

第4節 9区

1. 調査の概要

9区は今回の調査では、際西端位置する調査区である。北東から南西に向かって傾斜していく、斜面を切り盛りして築造された4枚の水田で構成されている。調査区は逆コの字形を呈し、丘陵の頂上部から谷のはぼ底までの調査区である。

9区は水田築造のための切土、盛土が激しく、上段では遺構を検出することができたが、中間の2段の水田は、削平が激しく遺構を検出することができなかつた（第14図）。

2. 層序

9区の層序は、最上段は丘陵の頂上部とはいえ、6区と比べると若干低くなっているためか、何回か水田の嵩上げを行っていることが確認することができた。また、他の調査区では、遺物は多量に出土するものの、明確な包含層と思われる層がなかつた。しかしながら、9区における第14層、第15層は、今回の調査のなかで唯一包含層と思われる層であった。

中間の2段については、他の調査区同様に斜面の上部を削平し、下部に盛土を行い、水田を築造している。また、何回かの嵩上げを行っていることも他の調査区における水田と同じである。

最下段については、谷の底部に近いこともあるのか、最南端では約1.5mの盛土が行われている。また何回かの嵩上げが行われていることも他と変わらないが、この調査区では、標高約58.4mの高さから、古い珪を確認することができた。時期については、不明である（第15図）。

3. 遺構

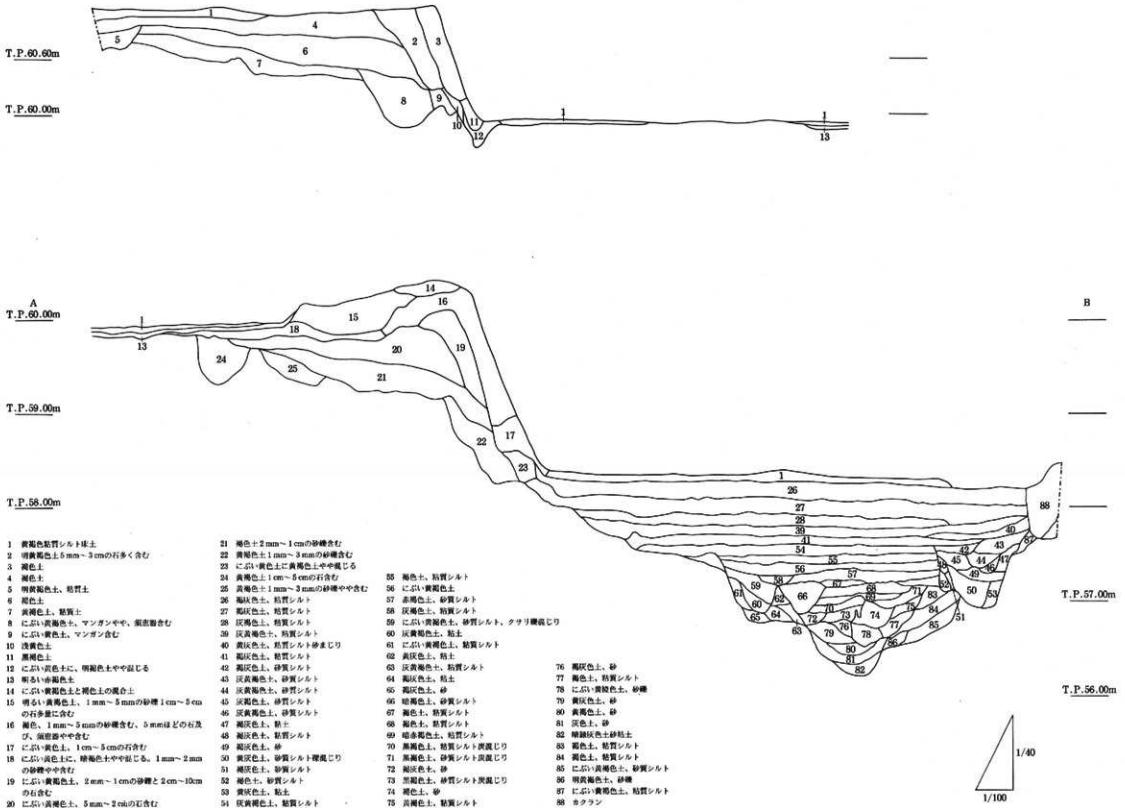
掘立柱建物跡

9区は、丘陵の先端部近くに位置するためか、削平の問題だけではなく、遺構の密度が少なくなってきたているように思われる。このなかで最上段から、柱穴、溝、土坑、掘立柱建物跡を検出した。また、最下段からも柱穴、土坑を検出したが、最上段の1棟のみしか復元できなかつた。

掘立柱建物跡は、B19-i4から検出した。2間×2間の掘立柱建物跡が、南側の一本のみは調査区外のため検出できなかつた。

柱間は約1.5mを測る。方位は6区、7区から検出した掘立柱建物跡と若干方位にずれがありN-50°-Eに振っている。柱穴は直径約60cmから20cm、深さは50から10cmを測る。柱穴の深さは一定していない。全ての柱から柱あたりを検出した。また、南東側中央の柱穴中央部からは、石を検出した。この石は、柱穴下端から浮いており、根石とは思われない。

埋土は、にぶい黄褐色シルト、柱あたりは褐色シルトなどである（第16図）。



第13図 8区土層断面図

B19-h
X=-165,180
B19-i

X=-165,190
B19-j

X=-165,200
C19-a

X=-165,210
C19-b

B19-9 Y=-43,880 G

B19,C19-10 X=-165,880

B19-5 Y=-43,840

B19-6 Y=-43,850

B19-7 Y=-43,860

B19-8 Y=-43,870

B19-4 Y=-43,830
B18-2

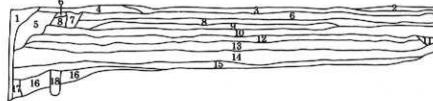
第14図 9区造構平面図

- 1 緑土
 2 暗灰黄色土
 3 黄褐色土
 4 黄褐色シルト
 5 淡黄褐色土 3 mm～1 cmの砂礫含む
 6 黄褐色土に褐色土や含む
 7 黄褐色土、洪積物
 8 褐褐色土に褐色土や含む、マンガンやや含む
 9 布岩付近の褐色土や含む
 10 黄褐色土、マンガン含む
 11 淡黄褐色土に褐色土やや含む
 12 黄褐色土に褐色土や含む
 13 黄褐色土に褐色土やや含む
 14 黄褐色土に褐色土やや含む
 15 にじい黄褐色土
 16 明褐色土と淡黄褐色土、礫合土質
 17 黄褐色土に褐色土や含む
 18 にじい黄褐色土と褐色土に黄褐色土層の組合土 T.P.64.00m

D
T.P.63.00m
C
T.P.62.00m

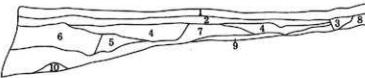


- 1 にじい黄褐色土
 2 暗紅褐色土
 3 にじい暗褐色土
 4 黄褐色土
 5 黄褐色土
 6 砂合土 1 mm～5 mmの砂粒、1 cm～3 cmの石含む
 7 明褐色土と褐色土の混合土 1 mm～3 mmの砂礫多く含む (地山)



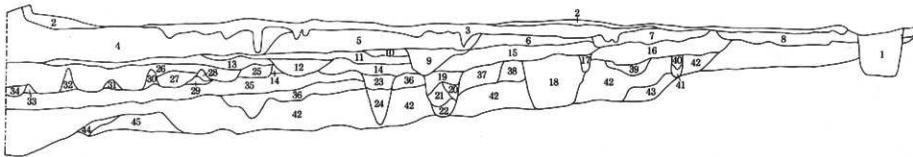
A

F
T.P.61.00m



E

H.
T.P.59.00m
T.P.58.00m



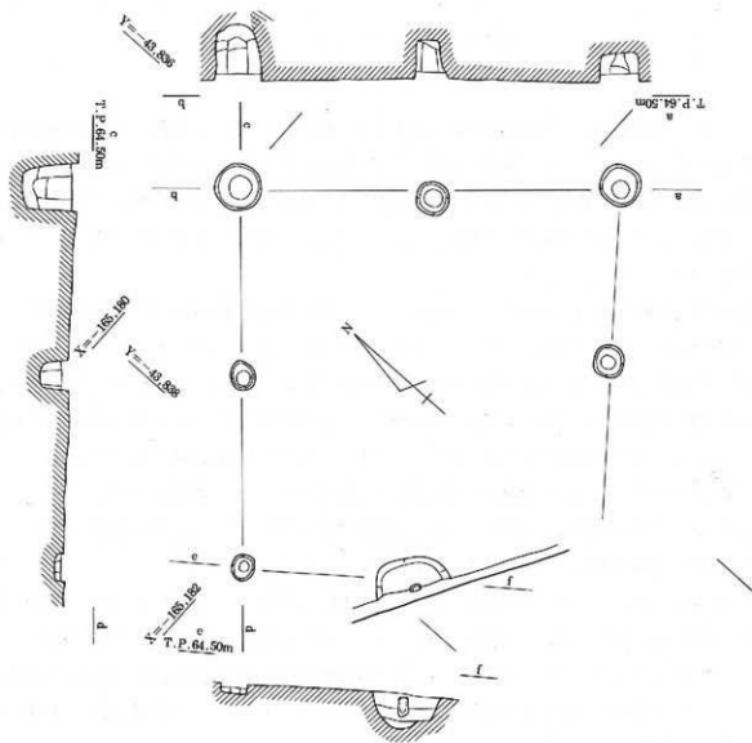
G

- 1 ラグラン
 2 黄褐色シルト
 3 淡黄褐色シルト
 4 深褐色シルト
 5 暗褐色シルト
 6 暗褐色シルト
 7 暗褐色シルト
 8 暗褐色シルト
 9 オリーブ褐色シルト
 10 黄褐色シルト
 11 オリーブ褐色シルト
 12 深褐色シルト
 13 暗褐色シルト
 14 にじい深褐色シルト
 15 深褐色シルト
 16 暗褐色シルト
 17 暗褐色シルト
 18 暗褐色シルト
 19 暗褐色シルト
 20 にじい黄褐色シルト、石含む
 21 暗褐色シルト、石含む
 22 暗褐色シルト、石含む
 23 にじい黄褐色シルト
 24 暗褐色シルト、石含む
 25 暗褐色シルト
 26 暗褐色シルト
 27 暗褐色シルト
 28 にじい黄褐色シルト
 29 にじい深褐色シルト
 30 にじい黄褐色シルト
 31 にじい黄褐色シルト
 32 にじい黄褐色シルト
 33 にじい黄褐色シルト
 34 にじい黄褐色シルト
 35 にじい黄褐色シルト
 36 にじい黄褐色シルト
 37 にじい黄褐色シルト
 38 にじい黄褐色シルト
 39 にじい黄褐色シルト
 40 黄褐色シルト
 41 にじい黄褐色シルト
 42 暗褐色シルト
 43 暗褐色シルト
 44 黄褐色シルト、石含む
 45 黄褐色シルト、地山



- 1 にじい黄褐色土
 2 にじい黄褐色と明るい褐色の混合土
 3 暗褐色土にじい黄褐色の混合土
 4 暗褐色土にじい黄褐色の混合土 1 mm～1 cmの砂粒含む
 5 砂合土 1 mm～1 cmの砂粒含む
 6 深褐色土 1 mm～3 mmの砂粒多く含む
 7 深褐色土 1 mm～3 mmの砂粒、1 cm～2 cmの石多く含む
 8 1～9号の混合土
 9 黄褐色土と深褐色土の混合土 1 mm～3 mmの砂礫多く含む (地山)
 10 明褐色土と深褐色土の混合土 1 mm～3 mmの砂礫多く含む (地山)

第15図 9区土層断面図



第16図 9区掘立柱建物跡

第4章 まとめ

これまで3年間にわたる陶器南遺跡における調査の結果では、遺跡の南部にある陶荒田神社から北に伸びる道路を境として、遺跡の様相が変化していることが明らかになりつつある。つまり、道路の西側の丘陵の先端部では、古墳時代後期から奈良時代の遺構が中心であるのに対し、道路から東側では、奈良時代や中世の遺構が主となる。これは、時代が下るにつけ、開発が丘陵の根元部分に及んでいったと考えられる。

道路から西側の区域は、遺跡の南に存在する、日本最大の須恵器生産地である陶邑窯跡群の工人集団の集落として捉えられてきた。今回の6区から9区の調査、及び今回は記載していないが1区から5区の調査でも、6世紀後半における須恵器生産集団の集落を確認した。これから考えると、陶器南遺跡における須恵器生産集団の集落は、丘陵の先端部の400m四方の範囲内に納まること、また、今回の調査では多数の柱穴を検出し、同じ場所で数回の建て替えをおこなっているにもかかわらず、時期的には極めて短時間の存続期間であったことが確認された。

前記したように、陶器南遺跡では、道路の東側ではこの時期に当たる遺構は非常に少ない。しかししながら、現状の地形をみると、そう傾斜は激しいものではない。

では何故、当時の人々は、丘陵の根元部分に充分開発できるような土地があるものかわらず、7区のような斜面地にまで掘立柱建物を建ててこの丘陵の先端部に固執したのであろうか。

まず考えられるのは、8区で検出した谷、及び丘陵の北側を流れる陶器川との関連を考えられる。この谷、陶器川を利用して須恵器をこの集落まで運び、谷と丘陵との中間部にある倉庫に収蔵したものと考えられる。

8区の谷は、その堆積状況から常時水が流れているとは考えられないが、この谷を利用して須恵器を運び込んだと考えられないか。遺跡の北側を流れる陶器川については、そのまま水運を利用していたと考えられる。

道路から東側は、8区の谷は非常に浅くなってしまっており、これを利用することは難しく、陶器川についても谷が浅くなりはじめる。

このため、集落は水運等を利用してできるこの範囲内に営まれ、結果的に道路より東側には伸びていかなかつたのではなかろうか。

第1表 出土遺物観察表

測定・ 記録 番号	種類	目 標	性 (m)				色 製	地 士	形状	長さ率	備考
			口 径	高	底-高合計	その他の					
B-1	須恵器	平 直	(15.0)	4.2			外: N6.0E 内: N6.0E 底: 5 YT3/2底溝	青	良好	口幅26%	灰紺復元
B-2	*	*	13.3	4.15			外: 5 YT1/底白 内:	3~4 mmの大いな小石、砂、粗砂含む 青	良	口幅100%	
B-3	*	*	12.6	3.9			外: 灰白 5 YT1/1、淡黄 5 YT3/3 内: 黄 5 YT3/6	青	良	口幅100% (口幅20%)	
B-4	*	*	13.4 底径: 13.4	3.8			外: N6.0E、7.5YT1/灰 内: N5.5E/青 底: N6.0E	青	良好	95%	焼きひずみあり
B-5	*	*	10.6	4.0			外: 7.5YT1/灰(赤色) 内: 7.5YT1/灰(赤色) 底: 7.5YT1/灰(赤色)	青、5 m迄までの白色層を含む。	*	口幅55% 大底の5%	ロクロ方向右屈り
B-6	*	*	12.5	3.7			外: N5.5E/青灰 内: N5.0E 底: N7.5E/底白	3~4 mmの大いな小石、砂、粗砂含む 青	*	口幅67%	ヘラ記号
B-7	*	*	(12.0)	3.0			外: 内: 須恵器 2.5 YT1/5 6/5、淡黄 2.5 YT3/4	青	良	口幅12%	灰紺復元
B-8	*	直	13.2	2.9			外: 7.5 YT1/1 (灰白色)	青、5 m迄までの白色層を含む。	*	口幅55% ロクロ方向右屈り ヘラ記号有り	
B-9	*	*	(22.0)	3.8			外: N6.0E 内: N6.0E 底: 5 YT3/1底灰	青 (1 m以下は白色部分、2 m の大いな白色層を含む)	*	30%	灰紺復元
B-10	*	*	14.3	5.0	タマミ量: 3.0		外: 5 YT1/底白 内: 5 YT1/底白	砂、粗砂含む 青	良好	口幅40%	ヘラ記号
B-11	*	*	13.2	3.25			外: 反NS/ 4/ 内: 反白N7/、反N6/	青 (0.3 m程度含む)	*	口幅25% 底100%	ヘラ記号 盛りあり
B-12	*	杯 直	(17.0)	6.8			外: N7.5E底白 内: N7.5E/白、10YT1/底灰	5 mmの大いな小石、砂含む。 青 (盛りしている)	良好	口幅80%	部分復元
B-13	*	*	13.2	5.9			外: 反N6/、單オーラー灰 2.5 GT1/1 内: 反白N7/ 6/	青 (0.2~0.3 mの層を含む)	*	日笠形 口幅一欠損	
B-14	*	杯 直	10.3	3.4			外: 5 YT1/灰 内: N6.0E 底: N4.0E	青、約 1~5 m程度の砂粒を含 む	良好	95%	焼きひずみあり
B-15	*	*	(12.0)	4.5			外: N6.0E 内: N5.0E 底: N3.0E底灰	青、約 1~2 m程度の砂粒を含 む	*	口幅25%	灰紺復元
B-16	*	*	11.4	4.7			外: N6.0E 内: N5.0E	3~5 mmの大いな小石、砂、粗砂含む。 青	*	口幅75%	
B-17	*	*	11.9	4.15			外: 反N6/ 5/ 内: 反N4/	青 (0.3~0.4 m程度含む)	*	完形 (口幅少しあげ て)	
B-18	*	*	11.3	3.8			外: 5 YT1/底 内: 10YT1/底	青、約 1~2 mの砂粒を含む	*	完形	焼きひずみあり
B-19	*	*	10.6	4.05			外: 反白N7/、反N6/ 5/ 内: 反白N7/	青 (0.2~0.4 mの層を含む)	*	*	完形 (55%)
B-20	*	*	11.2	4.3			外: 2.5 YT1/底白 内: 2.5 YT3/1底白 底: 2.5 YT1/底灰	3~5 mmの大いな小石、砂、粗砂含む。 青	良	口幅25%	
B-21	*	*	(12.2)	4.15	受付部量: 14.8		外: 5 YT1/底白 内: 5 YT1/底白 底: 2.5 YT1/底灰	青、約 1~2 m程度の砂粒を含 む	*	既述の割離のみ	内外ともに断続的 の状況
B-22	*	*	11.3	4.3			外: 10 YT1/底白 内: 5 YT1/底白	よく含む。 青	*	口幅100%	

測定・ 試験 番号	種類	特徴	法 量 (m)				色 調	地 土	性質	既往率	備 考
			口 井	深 高	底面高さ	その他の					
B-23	復原器	杯 壺	12.3	3.6			外) 灰白 5Y6/2 7/2, 深黄 5Y8/3 内) 灰白	密 (0.2m以下砂粒含む)	軟	完形	
B-24	×	×	(13.0)	4.9			外) 7.5Y6/1灰 内) 10Y6/1灰	砂、砂粒含む。 密	×	口壁25%	部分復元
B-25	×	×	(10.3)	3.7			外) N6/灰 内) 5B.P5/1赤灰	密 (1m以下の白色粘土、2~3m程度の白色小石粒数多く含む)	×	50%	反転復元
B-26	×	×	11.0	3.6			外) S5E6/青灰 内) N6/灰 5.5Y7/1青灰	7m大的小石、砂、砂粒含む。 密	良好 (強化している)	口壁60%	
B-27	×	×	10.9	3.65			外) 砂赤泥 10R4/1, にじみ赤系、2.5YR5/3 4/3 内) 淡赤泥 10R5/2 4/2	密 (0.2~0.4mの砂含む)	良好	完形	
B-28	×	×	10.6	3.7			外) 2.5Y7/1灰(黄 内) 5Y7/1灰白	3~4m大的小石、砂含む。 密	やや軟	100%	
B-29	×	×	11.8	3.3			外) N6/灰 内) N6/灰	密 (1m大的白色粘土、3m程度の白色小石粒数多く含む)	×	60%	
B-30	×	×	11.0	3.9			外) 10G4/2暗緑灰 内) N6/灰	砂、砂粒含む。 密	×	既往100%	
B-31	×	×	11.5	3.65			外) NT7/1白 内) 2.5YR6/1赤灰	密	良好 (強化している)	口壁60%	
B-32	×	×	(12.0)	3.8	受け端部: (D-4)		外) 5Y6/1灰 内) 2.5Y7/2灰(青 内) 2.5Y7/2灰(青)	密、 # 1m~2m程度の砂粒を含む	軟	口壁25%	内面、層面のため調査不明
B-33	×	小窓壁	残 6.1				外) 2.5Y5/3 (淡黄色) 内) ×, 10G5/1 (淡灰色) 内) ×	×, 3m位までの白色層を含む	×	口壁強~体部に かけて1/3強欠損。	クロ方向左回り 反転復元
B-34	×	高 杯	(12.3)	6.3	6.8		外) N6/灰 内) N7/1灰白	3~5m大的小石、砂、砂粒含む。 密	良好	口壁40% 既往100%	部分復元
B-35	×	×	(11.8)	5.9		受け端部: (D-3)	外) 2.5Y4/2灰白、10Y7/1灰白 内) N6/灰 5EP1/1赤灰、5P6/1赤灰、N7/1灰白	密	×	50%	×
B-36	×	(井筒)	(18.0)	(残) 5.8			外) 5Y5/1灰 内) 5Y6/1灰 内) 7.5Y6/1灰	密。 # 1m~3mの砂粒を含む	×	口壁20%	反転復元
B-37	×	樹 林	13.7	13.1	8.9		外) N5/0灰 内) 10T4/1灰 内) N7/1灰白、2.5YR5/1赤灰	砂含む。 密	良好 (強化している)	口壁20% 既往100%	
B-38	×	×	(14.2)	11.6	高台後: 8.8		外) N6/灰 内) 5Y6/1灰(オリーブ 内) N6/灰	密 (2m以下の長石含む)	良好	表面50% 高台 (近傍) は 表面強、外壁強	部分反転、外延、口壁側土質が複数、外壁 面に強度、自然強
B-39	×	大 量	最大高 8.9	底高: 31.4	上盤内孔: 11.0		外上部) 5Y7/1灰白 内) 10G5/1灰 内) N7/1灰白	密	×	60%	断木 (上部にへら記) クロ回転右回り
B-40	×	年 量	15.3	5.1			外) 5B6/1青灰、5BS/1碧灰 内) ×, N4/灰 内) N6/灰	密 (5~8mの葉化、1~2m の小石含む)	×	口壁80% 既往5%	ロクロ右回り
B-41	×	×	(12.8)	残 5.05			外) N5/灰 内) N6/灰、7.5YR5/2灰青	密 (3m以下の長石含む)	×	10%	反転復元 クロ回転右回り へら記号 (断木)
B-42	×	×	(13.2)	(残) 2.7			外) N5/灰 内) N6/灰	密	×	35%	反転復元 ロクロ回転右回り
B-43	×	×	9.2	残 2.7			外) 5P6/1灰 内) 5B5/1碧灰 内) N6/灰	密 (3m以下の長石含む)	×	80%	ロクロ回転右回り へら記号 (断木)
B-44	×	×	(19.0)	(残) 7.5			外) 1.5Y5/1灰、N5/灰 内) N6/灰、N5/灰 内) N6/灰、1.5Y4/4灰	密。 1~3m白色層多く含む	×	45%	反転復元 へら記号 ロクロ回転右回り

特徴・ 採取 場所 番号	種類	品種	粒度 (m)			色調	地 土	発 育	持存本 数	備 考
			口径	基 高	底面高台性					
9-6	風化層	灰 灰	(17.4)	基 高 5.8		内) N6/ 黄白 外) N6/ 黄 内) N6/ 黄白	赤	良好	48%	ロクロ回転右回り 反転元 全様に成る 内外に灰かぶり
9-7	*	*	(18.2)	基 高 6.35		内) N6/ 黄 外) 5RS/1赤	赤 (緑含む)	*	45%	反転光 ロクロ回転右回り
9-8	*	浮 身	11.5	3.35		内) N6/ 黄 外) N6/ 黄 内) N6/ 黄 外) 5YR5/25赤	赤	*	80%	ロクロ回転右回り
9-9	*	*	5.6	3.5		外) N6/ 黄, 10YR6/6黄 内) N7/ 黄白	赤 (1~3mmの小石含む)	*	辺境定期 口徑一部大顎	自然剥離 ヘラ記号
9-10	*	*	10.7 (10.1) (10.4)	3.65		内) N6/ 黄, 2.5GY6/1オーリーブ 外) N6/ 黄白	赤	*	完形	ロクロ回転右回り
9-11	*	*	(10.1)	4.25		内) N6/ 黄 外) N6/ 黄 内) 5YR4/1黒灰 外) 7.5YR4/1黒灰	赤	*	50%	反転光 ロクロ回転右回り
9-12	*	*	最大径: 14.5 最小径: 12.4	5.0		外) N6/ 黄6, 2.5Y7/2赤灰, N2/ 黄 内) N6/ 黄 内) N6/ 黄白	赤。2~3mmの小石含む	不良	辺境定期	受領のみ反転元 少が大
9-13	*	*	12.6	3.9		内) N6/ 黄 外) N6/ 黄 内) N6/ 黄	赤	良好	85%	ロクロ回転右回り
9-14	*	*	(11.1)	3.7		内) N6/ 黄 外) N6/ 黄 内) N6/ 黄	赤	*	80%	ロクロ回転右回り 一概反転光
9-15	*	*	10.6	3.5		外) N6/ 黄, 7.5Y7/1黒白 内) 2.5Y7/2赤 外) 2.5Y7/3黒灰	赤。6~7mmの黒斑、どうも、 白色の小石含む	*	辺境定期 口徑の50%	
9-16	*	*	13.0	4.2		内) N6/ 黄, 2.5GY5/1黒灰 外) 2.5GY6/1オーリーブ 内) N6/ 黄	赤	*	85%	
9-17	*	*	11.75	3.8		内) 10YR7/4/1オーリーブ 外) 2.5Y7/2赤 内) 7.5YR6/4	赤	良	辺境定期	ロクロ回転右回り
9-18	*	*	11.1	3.8		内) N6/ 黄	赤	良好	辺境定期	ロクロ回転右回り
9-19	*	*	(11.4)	3.6		内) 5P R5/1黒灰 外) N6/ 黄 内) N6/ 黄, 7.5YR5/3黒灰	赤 (緑含む)	*	口徑55%	ロクロ? 反転光
9-20	*	高 年	10.65	6.6	調節板: 9.6	内) 5Y7/1黒白 外) 5B5/1黒灰, N6/ 黄, 5 P5/1黒灰 内) N6/ 黄, 2.5YR5/3黒灰	赤 (2mm以下の砂含む)	やや良	辺境定期	ロクロ回転右回り
9-21	*	基	7.5		体積最大径: 9.4	内) N6/ 黄 外) 5B5/1黒灰 内) N6/ 黄, 2.5YR5/3黒灰	赤 (4mm以下の英石含む)	良好	体積完形	
9-22	*	鉛錠型	5.3		体積最大径: 12.2	内) 5 Y1/1黒白	赤 (緑含む)	良	65%	ロクロ回転右回り
9-23	*	*	(8.5)	基 9.5	体積最大径: (14.0)	外) 10Y7/1黒白, 5 B5/1黒灰 5 B6/1黒灰 内) 2.5YR4/3C1/1黒 内) 2.5YR4/3C1/1黒 内) 2.5YR6/4/1オーリーブ 10Y7/1黒白, 10Y7/1黒白	赤 (2~3mmほどの石粒含む)	*	口徑50% 体積60%	反転光
9-24	*	要	(23.2)	基 6.7		内) 2.5Y6/2赤 外) 2.5GY4/1オーリーブ 内) N6/ 黄 内) 5 RS/1黒灰	赤 (2mm以下の砂含む)	良好	口徑50% 体積60%	反転光元 少がぶり
9-25	*	平 盆	14.6	4.7		外) 2.5Y7/1黒白, 10Y5/1黒 内) N7/ 黄白 内) N6/ 黄 内) N7/ 黄白	赤 (5~4mmの黒斑、1~2mm の小石含む)	*	辺境定期 (口徑の50%)	ヘラ記号 ロクロ回転右回り
9-26	*	平 壁	最大径: 12.4 最小径: 10.8	4.8		外) 2.5Y5/1黒白 内) N6/ 黄 内) N7/ 黄白	赤 (2mmほどの白色小石含む)	*	辺境定期 (口徑の50%)	ヘラ記号 ロクロ回転右回り 少があり
9-27	*	要	23.7	39.7		外) 2.5GY4/1オーリーブ 内) N6/ 黄 内) N7/ 黄白	赤	*	口徑 各部の一 最大径 辺境定期	下間に剥離伴材 自然剥離

報 告 書 抄 錄

ふりがな	とうきみなみいせき はっくつちょうさがいよう							
書名	陶器南遺跡発掘調査概要・IV							
副書名	府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	竹原 伸次							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-0008 大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(941)0351							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	堺市陶器北	市町村	遺跡番号	34° 30' 35"	135° 31' 26"	1997年 9月16日～ 1998年 3月31日	9,147m ²	府営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
陶器南遺跡	集落遺跡	古墳時代後半	掘建柱建物 溝、土坑	須恵器、土師器				

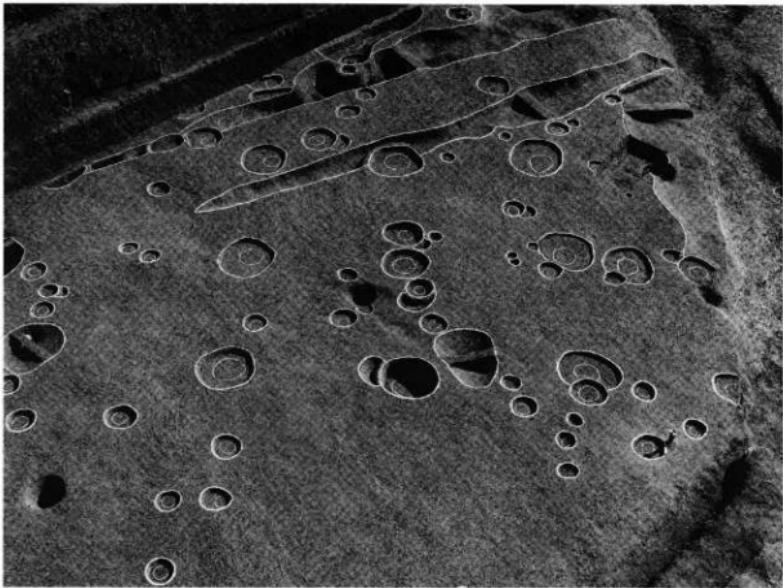
図 版



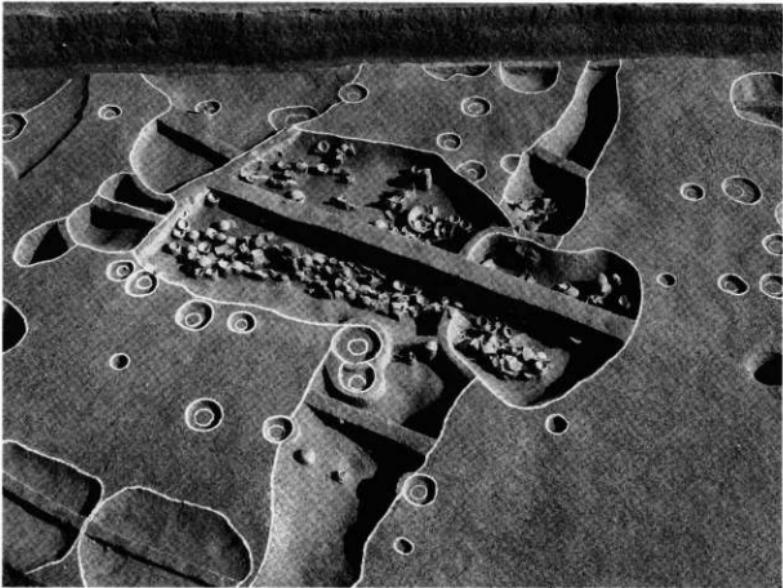
1、2段目全景（南から）



3段目全景（東から）



据立柱建物跡（西から）



土坑210・211、溝212（西から）



全景（南から）



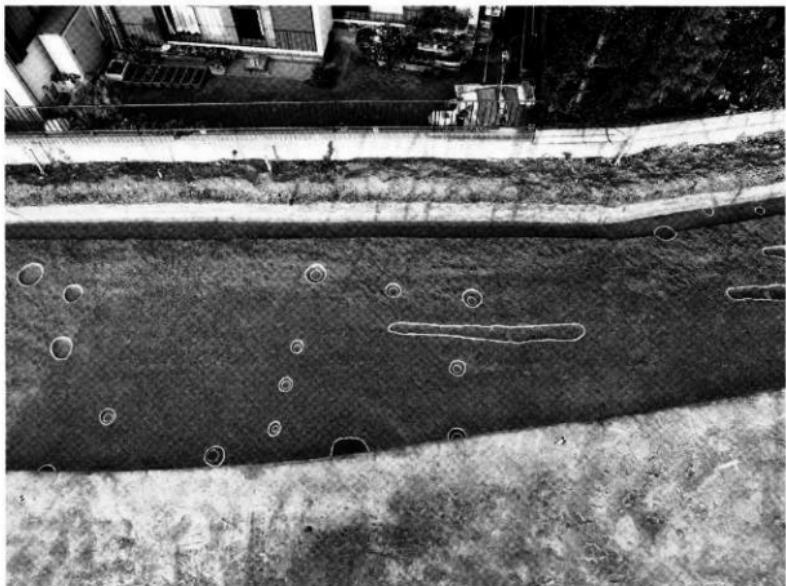
土層（南東から）



全景（北から）



谷（西から）



掘立柱建物跡（南から）



2~4段目全景（北から）

